

第 章 講演会

1 印刷業のデジタル印刷ビジネスへの期待と現実

社団法人 日本印刷技術協会 常務理事 山内亮一

講演会：「印刷業のデジタル印刷ビジネスへの期待と現実」

講 師：山内 亮一

開催日：2002年9月12日

会 場：(社)ビジネス機械・情報システム産業協会 第1・2会議室

参加者：29名

記 録：伊藤 昇*

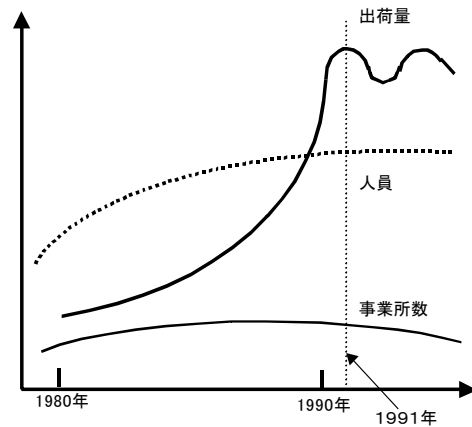
1. はじめに

印刷領域への電子写真の進出は各社が注力しようとしているがそれほど大きな規模になっていない。印刷業界側から見てデジタル印刷技術をどう考えておられるのか、何が必要なのかをご報告いただいた。他の団体（例えば日本画像学会）でも本件には注目が集まっている。

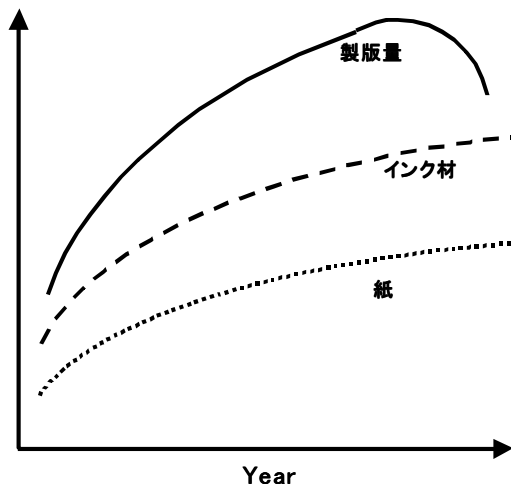
2. 内容の概略

印刷出荷量は1991年を境に減少。事業所数、人員も横ばいしないしはやや減少。これは景気だけでなくデジタル技術の急速な進展が背景にある（DTPにより印刷業を本業としなくても編集が可能となった）。

1970年以降カラーのニーズが大きくなり製版が近年頭打ちになるにも関わらず資材（紙やインク）の量は増加。

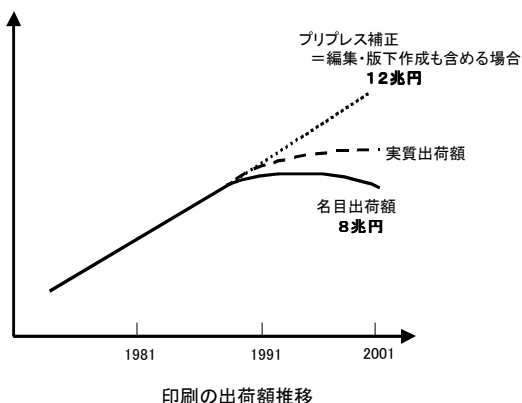


印刷業界の規模(出荷量、人員、事業所数)



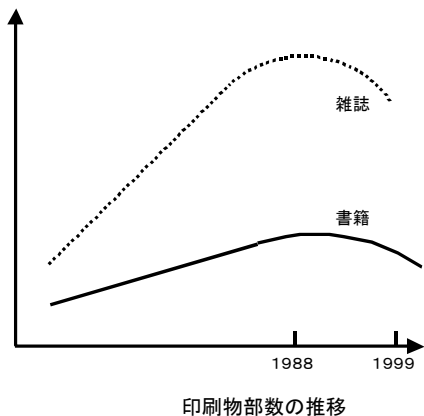
*技術調査小委員会委員

DTPの急増により印刷業の本来の利益であるブリプレスは減少。

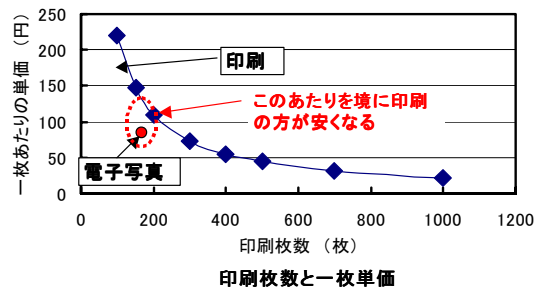


つまりパソコンにより編集・版下作成まで誰でもできてしまうので、昔のような写植の必要性が著しく減少。従って印刷による利益が大きく減少。印刷業界は印刷そのものだけで利益を出せる改革が必要。

印刷の内訳を見ると、インターネットなどの影響で読書量の減少で書籍や雑誌は減っているが、逆にサービス業などが牽引する広告関係は増加。



ということで印刷業もデジタル化の波に対応すべく取り組まないといけない。実際コンピューターによる製版は進んだけれど、最後の出力としての現状のデジタル印刷（つまり電子写真やインクジェット）には失望している。



とにかく一枚あたりのコストが高すぎる。カラー印刷であれば200枚を超えともはや印刷の方が安くなる。この点を改善しない限り電子写真やインクジェットの印刷への進出はありえない。

3. 結論

数年前は電子写真による出力と印刷による出力のコストが逆転する枚数は5000枚くらいと言われていたが、今回のご講演では約230枚とのことであった。印刷業界でもコスト削減に注力された結果であろう。逆に以前はコピー（特にカラーコピー）の画像厚みやざらつきが印刷とは相容れないレベルであると印刷業界から常に指摘されていたが、今回はそのようなことは述べられなかった。こちらの方は電子写真が進歩したということであろうか。いずれにしても印刷へデジタル出力器が大きく進出するための要件は、印刷業界の立場からするとまだまだ不十分であるとう事である。

以上

禁無断転載

2002 年度
事務機器関連技術調査報告書(“I-1”部)

発行 社団法人 ビジネス機械・情報システム産業協会
技術委員会 技術調査小委員会

〒105-0001 東京都港区虎ノ門1丁目21番19号
秀和第2虎ノ門ビル
電話 03-3503-9821
FAX 03-3591-3646